



Shueisha
Series
Common

ヤニス・バルファキス

齋藤幸平 [解説]

関美和 [訳]

テクノ封建制

デジタル空間の領主たちが

私たち農奴を支配する

とんでもなく醜くて、不公平な経済の話。

集英社シリーズ・コモン

この世で大切なことはすべて、
それと正反対のなにかをはらんでいると
教えてくれた父さんへ

TECHNOFEUDALISM: What Killed Capitalism

By Yanis Varoufakis

Copyright © Yanis Varoufakis 2023

Japanese translation published by arrangement with Yanis Varoufakis
c/o Aevitas Creative Management through The English Agency (Japan) Ltd.

はじめに

何年前かに、私は資本主義の簡潔な歴史を書いてみることにした。壮大な仕事なので、できるだけ噛み砕いて資本主義の本質に迫ろうと、当時一二歳だった娘に資本主義の物語を説いて聞かせるような体を装うことにした。そうして、娘ゼニアの了承も取らずに（そのことで一生彼女から恨まれることになったが）、娘に宛てた長い手紙のような本を書きはじめた。とにかく専門用語を使わないように気をつけ（資本主義という言葉さえ避けて）、私の書きぶりが若い世代に伝わるかどうか、資本主義のエッセンスを私自身が本当に掴んでいるかを示すリトマス試験紙だと自分に言い聞かせた。そうして書き上げたのが、『父が娘に語る美しく、深く、壮大で、とんでもなくわかりやすい経済の話』だ。その薄い本は、「なぜこんなに『格差』があるの?」という、娘のとても単純な疑問が出発点になっていた。

二〇一七年にその本が出版される前から、私はもやもやした感覚を抱いていた。原稿を完成させてから製本された本を手にするまでのあいだも、まるで今が一八四〇年代で、自分が封建

制についての本を出版しようとしているように感じることもあった。いや、もつと言うなら、一九八九年の終わりにソビエト連邦の中央計画経済についての本が目の目を見るのを待っているような、そんな気分だろうか。つまり、「今さら」という感覚だ。

その前作がギリシャ語、そして英語で出版されてからの数年間で、資本主義が減びつつある（しかも、これまでに何度もあったような単なる変容の一過程とは違う意味で）という私の奇妙な仮説はますます強固になっていった。コロナ禍のあいだにそれは確信に変わり、自分の考えを早く本にまとめなければと急かされているような気持ちになった。そうすれば、私の仮説に激怒していた友人や政敵が、私の考えをあらゆる角度から検証したうえで、きちんとこき下ろすチャンスにもなるはずだと。

では、私の仮説とは？ それは、資本主義はすでに死んでいる、というものだ。つまり資本主義の力学がもはや経済を動かしてはいない、という意味だ。資本主義が担ってきた役割はまったく別のなかに置き換えられている。その別のなかに私は「テクノ封建制」と名づけた。私の仮説は最初はわけがわからないと思われるのだが、実はこの呼び名が今の状況にピッタリと符合することをお示しできればと思っている。どういうことかと言うと、皮肉にも、資本主義を殺したのは……まさしく資本なのだ。といっても、産業革命の幕開けから私たちが馴染んできた資本ではなく、新しい形の資本のことだ。資本はこの二〇年で突然変異と言えるほど変容し、歯止めの利かなくなったウイルスのように、その宿主を殺してしまった。なぜこんなことになってしまったのだろうか？ 主にふたつの出来事がそうさせた。ひとつはアメリカと中国の

巨大テック企業によってインターネットが支配されるようになったこと。もうひとつは、二〇〇八年の金融危機に対する西側諸国の政府と中央銀行の対処の仕方だ。

この件についてなにか言う前にまず、本書についてはつきりさせておきたい。この本は、将来テクノロジーが私たちに何をたらすかを書いたものではない。この先AIチャットボットが人間の仕事を奪うとか、自律型ロボットが人類を脅かすとか、マーク・ザッカーバーグが大した考えもなくメタバース「インターネット上に構築された三次元の仮想空間」をはじめとかいったことについて書いたものでもない。そうではなくて、この本はすでに資本主義に起きたことについて、すなわち私たちに起きてしまったことについて書いたものだ。私たちみんなが使っている、スクリーン越しにクラウドにつながったデバイス、つまりどこにでもあるラップトップやスマートフォンを通して私たちの身の上ですでに起きたことについての本であり、それと並行して二〇〇八年からずっと各国の中央銀行と政府が行ってきたことについての本である。私がここで取り上げようとしている、歴史に残るような資本主義の変容はもうすでに起きている。だが、膨張する債務への不安、感染症の流行、戦争、気候変動といった緊急事態であたふたしていたために、ほぼ気づかれていなかったただけだ。今こそ、私たちが資本主義の変容に注意を向けるべき時がやってきたのだ！

よくよく周りを見てみれば、資本の突然変異が起きていることは明らかだろう。私はそれを「クラウド資本」と名づけた。このクラウド資本への変異が資本主義のふたつの柱を消滅させた。それは市場と利潤だ。もちろん、市場と利潤は今もあちこちに存在する（ご存じのように、

かつての封建制のもとでも市場と利潤は存在していた）。ただし、今はもうこのふたつが主役ではなくなった。この二〇年のあいだに利潤と市場は、私たちの経済社会システムの中心から隅っこへと押しやられ、別のものに置き換えられた。では、なにに置き換えられたのだろうか？ 資本主義で媒介役を担っていた市場は、市場のように見えるが市場ではないデジタル取引プラットフォームに取って代わられた。そのプラットフォームは「封建領地」とでも呼んだほうが理解が進むだろう。そして資本主義のエンジンである利潤は、かつての封建制にも存在した、あるものに置き換えられた。それがレント「地代・小作料」だ。具体的に言うと、こうしたプラットフォームやクラウド「インターネット上のデータの保管場所」にアクセスするために支払わなければならない場所代のようなものだ。私はこれを「クラウド・レント」と呼んでいる。その結果、今では本当に力を持っているのは、機械や建物や鉄道や通信ネットワークや工業ロボットといった伝統的な資本の所有者ではなくなった。伝統的な資本の所有者は引き続き労働者から利潤を引き出しているが、かつてのような中心的存在ではない。これから見ていくように、彼らは家臣になった。つまり、クラウド資本の所有者という新たな封建領主階級の封臣となったのだ。それ以外の私たち全員はかつての農奴としての地位に戻り、無償の労働を通して新たな支配階級の富と権力に貢献している。もちろん機会が与えられれば賃労働もしているわけだが。

こうした出来事は、私たちの生き方と経験になんらかの影響を及ぼしているのだろうか？ 当然、影響している。第五〜七章で説明するように、この世の中がテクノ封建制になっている

ことに気づけば、今起きている大小さまざまな謎を解くのに役立つはずだ。たとえば、グリーンエネルギー革命とはいったいなんなのか、イーロン・マスクはなぜツイッター「現X」を買収したのか、アメリカと中国はなぜ「新たな冷戦」に突入したのか、ウクライナ戦争はどのようなドルの覇権を脅かしているのか、といったことに。また、自由な個人はなぜ消えたのか、社会民主主義はなぜ実現不可能なのか、仮想通貨への期待はなぜ裏切られたのか、そしてなにより、どうしたら私たちは自立と自由を取り戻せるのかについても。

二〇二一年も後半になると、私はこうした確信に突き動かされ、コロナ禍によってますますその確信は強まり、行動を起こすことにした。腰を据えてテクノ封建制を簡潔に紹介する本を書こうと決めた。テクノ封建制とは、資本主義に取って代わった、はるかに醜い社会の現実のことだ。ただ、ひとつ引っかけたのは、だれに向けて書くか、ということだ。私はあまり深く考えもせず、ある人に向けて書こうと決めた。それは、私ごく幼い頃に、私に資本主義について教えてくれた人だ。のちにその人物は私の娘と同じように、私に単純な問いをひとつ投げかけてきたことがある。この本の大部分がその問いに答えるものだ。そしてその人物とは、私の父だ。

せっかちな読者のために、あらかじめおことわりしておこう。テクノ封建制についての説明は第三章まで出てこない。私の書くことを理解してもらうにはまず、ここ数十年における資本主義の驚くべき変容を振り返る必要がある。それが第二章だ。本の冒頭にはテクノ封建制の話はまったく出てこない。第一章では、私の父が金属片とヘシオドスの叙事詩の助けを借りなが

ら、六歳だった私にテクノロジーと人間の複雑な関係と、資本主義の本質をどのように説明してくれたかを書いた。この教えが、その後にくすすべての考えの原則を導く出発点になった。そして結論へと導いてくれたのもまた、一九九三年に父が私に投げかけた一見単純な問いだった。だから、ここからは父への手紙という形でしたためることにする。この本は、父の大切な問いに答えようとする私の試みである。

はじめに 4

第一章 ヘシオドスのぼやき 15

父の「友人たち」

子供のための史的唯物論入門

熱から光へ

いとも奇妙な資本主義入門

これまた奇妙な貨幣入門

選択の自由？ それとも失う自由？

父さんの質問

第二章 資本主義のメタモルフォーゼ 43

取り戻すことができないものを取り戻す

官民一体のテクノストラクチャー

関心争奪市場とソ連の復讐

大胆不敵なグローバル計画

異常な数字

恐れ知らずのグローバル・ミノタウロス

コントロールできない不満からコントロールされた解体へ

ミノタウロス好みの侍女——新自由主義とコンピュータ

父さんの質問に戻ると

第三章 クラウド資本 83

支配・命令する資本

ドンからアレクサへ

シンギュラリティ

インターネット・コモنزの誕生

新たな囲い込み

クラウド資本——そのはじまり

クラウド・プロレタリアート

クラウド農奴

市場よ、さようなら、クラウド封土よ、こんにちは

父さんの質問に戻ると

第四章 クラウド領主の登場と利潤の終焉

125

新たな支配階級の秘密

二〇〇八年の金融危機の意図せぬ結末

腐った貨幣、金ピカな不況

クラウド領主にとって、利潤が「あってもなくてもいいもの」になった経緯

プライベート・エクイティによる不正

父さんの質問に戻ると

第五章 ひとことどで言い表すと？

153

レントの復讐——利潤はいかにしてクラウド・レントに屈したのか
筋肉増強剤を打った資本主義なのか？

イーロン・マスクがツイッターの買収にあれほどこだわった理由

テクノ封建制が「大インフレ」を引き起こす

ドイツ車とグリーンエネルギーの事例

父さんの質問に戻ると——資本主義は復活したのでは？

第六章 新たな冷戦

187

——テクノ封建制のグローバルなインパクト

中国版テクノ封建制

テクノ封建制の地政学——中国クラウド金融の脅威

テクノ封建制の地政学——ウクライナ問題とふたつの巨大クラウド封土

ヨーロッパ、グローバル・サウス、そして地球を覆うテクノ封建制の亡霊

父さんの質問に戻ると——勝者と敗者はだれだろうか？

第七章 テクノ封建制からの脱却

219

自由な個人の死

社会民主主義の限界

期待を裏切った仮想通貨

「もうひとつの今」を想像する

民主化された企業

民主化された貨幣

共有財としてのクラウドと土地

テクノ封建制を打倒するためのクラウドの反乱
最後にもう一度、父さんの質問に戻ろう

附記① テクノ封建制の政治経済学 264

附記② デリバティブの狂気 294

謝辞、そして影響を受けた本や作品 298

解説 日本はデジタル植民地になる 斎藤幸平 301

註 308

凡例

- ・ 訳註は「」で示した。
- ・ 外国語文献からの引用については、本書の訳者が訳出を行った（邦訳のある書籍については、代表的なもの書誌情報を巻末の註で示した）。
- ・ 邦訳のない外国語文献については、原著にしたがって文献名と著者名を巻末の註で示した。

第一章

ヘシオドスのぼやき